
プラネット・ネックレス

まも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プラネット・ネックレス

【著者名】

まも

【あらすじ】

お酒を求め銀河をわざわざウオーンバットの街。

いいか？ 世界は、運命的に何かが繋がっているんじゃなくて。いいか？ 世界は、人為的に何かに繋げているからそう見える。

なあ、『ゴールド・シアレス』よ。

「スニーー。突然、お前は何が言いたいんだ」

手に持つほのかにグレープの香りがするグラスに映るスニーーに言葉を反射させる。わかるまで説明しようか。と隙だらけの笑顔でスニーーは返すと、即座に『ゴールド・シアレス』は頬杖をつきながら「いや、いいよ。勿体無いから取つておきな」と、被つていた皮の帽子を更に深く被つた。

「こ、『スタンガン』と投げやりに描かれた看板の酒場内に、淋しげな一つの小さな背中が迷い込んでいた。看板には乾いた風が突き抜け、今にも取れそうな勢いで揺れている。その矮小な酒場から視界を遠ざけると様々な形をした機械が、所狭しと並べられていた。それは、鳥に似たものや、龍に似たもの、動物に模した形が大半であつた。

また一つ、遙か上空から地上に降りる機械が雲の切れ目からゆっくりとこの小さな惑星に顔を覗かせた。

「すまん。『キリキリグレープ』もう一杯頼む」

空になってしまったグラスを前に出し、底を『ンンンン』とつづいた。

カウンターで響くその音は店内に座る者達の注目を集めるのはいつも簡単だった。今いくよ。とアクションを送ったそのバーテンは、服こそ着ているものの明らかに人間とは別の種族。

いや、今この酒場内で人間なんていたら、とてもじやないが遙かに見劣りするであろう威圧感を持つた異形の者達ばかり。

「いい感じに見られてるじゃねえか。お前の特技はほんと立派だな」

スニーーは、胸元に吊るされた葉巻を取り出し口に咥え、火をつけた。意味ありげな溜め息と共に吹き出された行き場の無い煙が宙を舞つた。

シアレスは静かに帽子をかぶり直した。

「あんたら…。“ウォンバット”……か？」

マスターは腕を捲り、カウンターへとドン。と置きながら尋ねる。逞しい蛇皮が顔をちらつかせている。帽子を被る彼の前に置かれた透明度の高い紫色の液体がゆらゆらと動く。

「そいつを飲んだらちつと消えな。目障りなんだよ、その臭い毛皮をちらちらと。ただでさえてめえらが着てるその皮の服。誰の皮だ？感謝もせずに身につけやがってよオ。そんなにだぶだぶでサイズが大きいモン、必要ねえだろ。てめえらにくれてやるのがもつたいねえくれえだ。この種族は人目につくのを嫌つて肌を露出させないと聞いたが、変わりモンらしいな」

店内に置かれた円状のテーブルからぞろぞろと、カウンターに座る彼らを優に頭4つは凌駕するであろう長身。

加えて屈強な体を持つ荒くれ者達がそれぞれの手にさまざまな武器を持ち歩み寄る。その数、約四十。

「なあ、どうあるよ。ゴールド・シアレスよ」

手に持つていたまだ新しい葉巻を灰皿へと押し付ける。

「うん？ そうだな、スニー。どうにもこいつをゆっくりと呑ませてくれる雰囲気じゃ無いらしくな」

「やうだな。どうあるよ。ゴールド・シアレスよ」

「うん？ そうだな、スニー。こいつは一発、やるしかあるまいよ」

突然、スニーはシアレスの頬を思い切り右手で殴る。

当然、右へと体は飛んだ。

歴然、壁にぶつかり、瓦礫とホコリが立ち込める。

田の前に放り出されたこの状況に、呆気に取られる木偶の坊達。これをしかと確認したスニーは、座つたまま椅子ごと後ろに回転し後方に飛ばした。

樹木に群がる鳥を追い払つように、ぱつぱつぱつたと異形の者達は倒れていった。

残るは、半数。

「ば、馬鹿な！ 床に溶接してゐる椅子だぞ！？ 一体何しゃがつた！」

「知らんなあ。ガタが來ていたんだろ？」

ふわりと体が落ちゆく最中に確かに聞こえたその言葉。

スニーの体が着地するとほぼ同時に瓦礫と化した壁から勢いよくシアレスが敵に向かい、飛び出す。

被っていた帽子を右手に持ち替えると手の中で発光をしながら棒状に形を変えた。

空中で捻らせた体躯は、腰を抜かすほどの殺氣を醸し出しバネのように体の形狀を元に戻しながらこう呟いた。

「寝るにはまだ早い時間だつたかな？」

轟音と共に低い唸り声の集合体が宙へと舞つた。さらに半数以上がこの一瞬で戦闘不能へと陥つた。攻撃から身をかわした者達から焦燥感が漂つ、額に汗をかくだけの者も居れば固唾を飲んで身震いをしだす者。

それぞれが様々なアクションを起こしていた。

その原因。それはまさしくこの一人。

背丈は小さく、平たい鼻、うつすら全身に毛を纏つた風貌。

“ウォンバット”の一人。

思い出したように中の一人が声を震わせ張り上げる。

「…プラネットネックレス、プラネットネックレスだ！」

導火線に火をつけたように次々に声を上げた。

「ウォンバットのプラネットネックレス……？　ま、まさか…あの

賞金首！？ あの伝説の…！？」

音はその一言を残して去り、酒場には一つの小さな背中が佇んでいた。

「全く、お前さんがいらぬ事をしたお陰で呑めなくなつちまつたらうが」「

星が輝く宇宙空間に一艇の“ハヤブサ”を模した船。その中には小さい一つの背中が落ち込んだような雰囲気を出していた。許せ、と帽子を手入れしながら平謝りするシアレス。

それを見たスニーは額に手を当て唸り声と溜め息の混じったものを口から発し、椅子に深く座り直した。不機嫌な彼を横目にシアレスは動じる事もなく帽子を被り身を乗り出す。

「まあ、次の場所を探すとしよう。折角あまり知らない銀河にやつてきたんだ」

何を表しているのかわからない計器がずらりと並べられた中からおもむろにボタンの付いたものを3度ほど押していく。乾いた機械

音がしたのちに天井に切れ目が現れ、先端にモニターのあるアームが丁度目線の当たりに降りてきた。“電子ペリカン”とモニターには映し出されている。

「ここからそう遠くないポイントに酒場があるな、屋台タイプのようだが」

さしづめ、宇宙ステーションのようなシステムの酒場である。先程訪れていた惑星に設置された酒場とは違い、船繋りした状態で利用が可能なため気軽に立ち寄れる事から人気が高い。

「屋台式か、また喧嘩にならなきゃいいが」

軽く溜め息をこぼしながら身を起こすと共に呟いた。「勘弁してくれ」と言いながらシアースは手をひらひらと泳がせる。椅子の前面に設置されたレバーを握るとハヤブサを模した船の後方から鈍く青く光が発せられ、目にも留まらぬ速さでその場所を後にした。数分間光り輝く星々の中を翔けると、箱状の機械を中心に、幾つもの管が周りを廻っている施設が見えてきた。

「うん？ あれは“ディングゴ族”的じゃないか？」

シアレスは施設の左側に停泊された狼のような形の船を指差し、またコックピット内の装置に手を伸ばす。先程のモニターを出し、データベースと書かれた項目をタッチし『ディングゴ』とサーチをかけた。

『スキヤニング。形状、生体反応から97%の割合でディングゴ族の船と判定、搭乗者、ジーク・ジャー・ジェロック他数十名』

機械チックな音声が淡々と喋り、画面には犬のよつた風貌の人物が映し出されていた。下方部には殺害、捕縛した場合の懸賞『スタンチック惑星』と書かれている。

平たい鼻を指で軽くかきながらスニーーは「正直、会いたくは無い連中だな」と呟く。ホバー運転に移行し反対側に船をつけようと思つたその矢先、そそくさとディンゴ族の船はその場を後にした。

「おや？ もう出ていくよだぞ」と、嬉しそうな様子で声を漏らし、ささ、早く。と嬉々とし酒場へと足を踏み入れた。

『や上陸してみるとそこには凄惨な光景が広がっていた。家屋は壊され、死体は転がり、完全に酒場としての機能を失っていた。白く大きな壁の上部にはこつ書かれている。

『『プラネットネックレス！　いや、クソウォンバット！　汚らわしい体を“俺様”の銀河に持ち込むんじゃねエ！　近くにいるならしらみ潰しに酒場を探しまわつてその首、搔つ切つてやる！』』

しばらくその文字を睨みつけた後に胸元に吊るされた葉巻を取り出し火をつけ蝶る。

「さて、どうしたものか。俺たちは酒を呑みに来たのにこれでは面倒な事になつたな」

「なあ、どうするよ。スニーーよ

「うん？ そうだな、シアレス。どうもゆつくりと酒を呑ませてくれる雰囲気じゃなれつだな

「なあ、どうするよ。スニーーよ」

「うん？ そうだな、シアレス。」こつは一発、やるしかあるまいよ

火をつけたばかりの葉巻を地面に落とし、踏みつぶした。

「お頭ア！ 奴等ア いませんね！ これで軒田ですぜ！」

「矮小で実に愚かしい種族、ウォンバットめ……。この俺様の銀河
このうのうと足を踏み入れやがって……」

お頭と呼ばれている他のものとは一回りほどサイズの大きいそれは、怒りから来るのであろうか。ぶつぶつと何かを呟いており声が耳に通つていなかつた。

「ウォンバットもなんでこいつ救いようのねえ馬鹿なんだろ？ お頭の銀河に来るなんてよ

「まあ、そう言つてやるな。危険がわからない馬鹿なんだろ？ 二人組のウォンバットって時点で宇宙を旅するには値しねえだろ？」

「つむ……。この手配書にある懸賞が『ブルタン惑星』ってのも何かの間違いだろ?」

「船の形が載つてないあたり、そんなんだろ? ウォンバット如きがプラネットネットワークレスなワケがねえ。お頭のよつなお人に会つ懸賞だろ?、惑星は」

小声で会話をしている集団は全て犬のような風貌をしている。大きめのテーブルを囲つて話をしている横には真新しい酒瓶がところ狭しと置いてある。その酒瓶達とは丁度反対側の場所に小さな階段があり、お頭の居る「ツクピット」と続いている。

「次の目的地が決まつたぞ。降りる準備をしろお前ら」

一斉に一声に反応し、湖に石を投げ入れ波紋を起こすように次々と振り向いた。

船内の窓から外の様子をうかがうと、灰色の惑星がだんだんと近づいている。これが目的地らしい。

「野郎ども! 今回も同じように目的はウォンバットの“駆除”だ!
見つけられない奴は酒をとにかく集めろ! いいな!」

船内に地を搖るがすほどの雄叫びが巻き起つ。搭乗員十数名全てを集めこの統率を取つてゐるこの男こそが、ジーク・ジャー・ジエロックだ。

賞金首なのだが、惑星間を行き来する者たちには金銭の価値觀が皆無。故に惑星を懸賞として出しているのだ、その惑星懸賞が掛けられた者たちをプラネットネットワークレスと呼ばれている。

灰色の雲をかき分け、狼を模した船は大地へと降り立つた。

“荒くれ獣人、この場所立ち寄るべからず”

朽ちかけで木製の看板に描かれた文字。両脇には伸びているが何処と無く張りのない有刺鉄線が。

空は灰色の雲に覆われ、辺り一面どこに目をやつても全く魅力のない荒野、岩ばかり。だが、こんな惑星にも必ず酒場はあるのだ。

惑星は寂しげな雰囲気を漂わせているが、ぽつんと佇むその酒場の周りにだけ様々な動物を模した形をした船がとまっている。

しばらく乾いた風が吹き抜けていると轟音と共に遙か上空から一隻の狼に似た船が降りてくる。地上に近づき、砂埃を巻き上げながらゆっくりと着陸した。

「まずはあの店からだ！　周囲にとめてある船も残らずやつちまえ！　いいな！」

引き金を引いた拳銃のような勢いで先陣を切っていく。すると、酒場の古びた扉が軋んだ音を立てながら開き、帽子を被りコートを羽織った小柄な男が出てきた。

「随分と、物騒な事しようとしてるじゃないか」

船に手をかけようとしている者たちが止まり、「なんだテメエは」と言つた様子でだんだんと近づいていく。その男の周りには既に數十名のデインゴが取り囲んでいた。

「血ら殺されに来たか、俺たちはかの有名な、この銀河を統括するデインゴ族だぜ」

「ほひ、それは恐ろしい事だな。命は助けてくれないのか?」

デインゴは思わず言葉にきょとんとした表情で数秒他の者と顔を合わせ、笑いが起ころ。ジークはその様子を狼を模した自分の船の近くで腕を組み見ていた。

「じりやあいい！こんな腰抜けは今まで見たことがねえ！“スタンガン”って酒場で暴れた野郎を探してんだが、お前は知らねえか？」

高らかに笑いながら帽子に手をかける。

「おーおい、触るなよ。そいつは俺の大事な獲物だ」

そう呟くと共に右腕で腹部を殴り、デインゴ一匹をそそり立つ岩へ向かって吹き飛ばした。鈍い衝撃音と風があたりに響いた。笑みを浮かべたまま何が起つたか理解できずに周りを見渡すデインゴ達。

衝突したデインゴは、口から血液と内臓と思しきものを垂らしながら

がら細かく痙攣していた。

「おつと、こりや失礼。銀河を統括する程だと聞いたのでもつと頑丈かと思つたら。手加減しないといけないらしいな」

ハッと気がつき、怒りの表情へと見る見る変わっていく。

「て、てめえ！ 生きて帰れると思うなよ！」

「おや？ 元々殺すつもりじゃなかつたのか？ 気を抜くなよ。死ぬぜ」

軽く口元を緩め、肩をすくめながら物怖じせずに言葉を投げ返す。いざ、ディンゴが一斉に飛びかかるとした時に後方で様子を見ていたジークが待てと号令をかけ、指を男へ向け喋りだす。

「お前……何者だ……？」

「おまえさんと同じ、プラネット・ネックレスさ」

おもむろに小柄の男は腰のポケットに手を伸ばし、一枚の手配書を広げた。それを見たディンゴ達は後方へと跳んだ。

「ジーク・ジャ一・ジエロック。この銀河をねぐらにしてる宇宙海賊か。殺害懸賞はスタチニツク惑星。誰も見向きもしない悪環境で有名な辺境の星じゃないか。クク。まるでいらないものをくつつけられただけだな」

肩を揺らしながら笑い、手配書を無残にも破り捨てた。

「俺様と同じだと、ならばお前は一体いくつの惑星を懸賞にかけられている」

問い掛けに対し、静かに帽子を取る。

平たい鼻に、全身毛むくじゃら、小さな背丈に大きな帽子。その男はウォンバット、ゴールド・シアレスである。

シアレスは体の前で4本指を立てた。

「……4つだと……？」

ジークの額には一筋の汗が光っていた。驚愕している彼にたいしてシアレスは左右に首を振り、口を開いた。

「……42個さ」

突然、上空から小さなモノが勢い良く地面に向かって突進した。その衝撃で「aign」「達を一掃、巻き上がる砂埃に混ざり影が起き上がる。

「シアレスほどじやねえが、俺は38個だな」

平たい鼻に、全身毛むくじゃら、小さな背丈、胸でなびくは大きな葉巻。その男はウォンバット、スニーである。

想像を絶する光景を目の当たりにし、ジークは完全に手も足もない状態だった。おどろおどろしく、重く唇を動かし必死に声を出した。

「プ、プラネットネックレスのウォンバット……、聞いたことがあら……。遙か昔に起こった銀河間の戦争で敵側の数十個もの惑星を

たつた一人で沈めた化物……。英雄と称され、引っ越し無しに戦争へと駆り出されるのに嫌気がさしその身を宇宙のどこかに隠したと聞いたが……」

「へえ、よくわかつてるじゃねえか。酒場を次々に潰してくれたお礼にいいモンくれてやる。覚悟しろよ」

灰色の空に、甲高い悲鳴が轟いた。

「まったく、結局海賊退治しても“荒くれ者は呑むな”なんて言われてまた呑めなかつたじやねえか」

スニーは胸に吊るされた葉巻を取り、ぐるぐると回しながらぼやいている。

帽子を手入れしながらすまん、と平謝りするシアレスを見て深い溜め息をつきながら椅子へと倒れ込んだ。

「まあ、そう、落ち込むな。まだどこかいい店があるかもしない

ぞ」

シアレスは身を乗り出し、設置されている機械を一、二度触るとモニターが天井から降りてきた。

「……から少し先にいった銀河に……」

ハヤブサを模した船の後方から青い光が噴射され、遙か彼方へと飛び立つていった。

(後書き)

「」で読んで下せりてありがとうござむ。
「」意見、「」感想、誤字脱字、読んだ時間を返せなど、どうぞおどり
べ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1308m/>

プラネット・ネックレス

2010年10月15日16時16分発行